

リ
セ
ツ
ト
2

ルーナの兄弟たち

▲風姫

ルーナを護る風の精霊王。

▲ユアン

次兄。のんびり屋

▲ジーン

長兄。しっかり者。

▲アマリー

姉。勝気な美少女。

▲バートランド

クレセニア国王で、リュシオンの父親。

▲キーラ

クレセニア王妃で、リュシオンの継母。

◀マヌエラ

ネグロ侯爵令嬢。リュシオンを慕う。

フレイル(14歳) ▲

精霊使いの少年。その力は他人には秘密にしている。

カイン(16歳) ▲

公爵家に身を寄せる謎の少年。普段は穏やかだが怒ると……

▲リュシオン(16歳)

クレセニアの王太子。魔力が強すぎて周りから恐れられている。

▲ルーナ(8歳)

女子高生・千幸が転生した姿。リヒルーチェ公爵令嬢。前世の記憶と強大な魔力を持ちつつ0歳から人生やり直し中。

千幸(享年18歳) ▶
超不幸体質の女子高生。

第一章 時^まかれる災禍^{さいご}の種

誰かを傷つけようとも、守りたいものがありますか？

クレセニア王国王宮の大広間。ここでは今、華やかに着飾った貴族の男女が集まり、社交に勤^{いそ}んでいた。

広い室内の天井には、〈照明〉の魔法を組み込まれたクリスタルガラスのシャンデリアが並び、いたるところに飾られた生花が、贅^{ぜい}を凝^こらした煌^{きら}びやかな室内へさらに色を添えている。

クレセニアの王太子リュシオン・アストウル・レイ・クレセニアは、そんな大広間を無表情に見渡しながら、給仕から受け取ったグラスに口をつけた。

艶^{つや}やかな黒髪に瑠璃色の瞳。あと一ヶ月ほどで十七になる王太子の大人びた美貌に、若い娘のみならず会場中の女性が熱い視線を向けている。

(社交という名の腹の探り合いか……くだらない)

リュシオンが冷めた目でそう評した時、その胸中の声を咎^{とが}めるように背後から声がかけられた。「笑顔をお忘れですよ、殿下」

穏やかに微笑みながら近づいてきたのは、アイヴァン・クレイ・リヒトルーチェ。クレセニア随一の名門貴族、リヒトルーチェ公爵その人だった。

「公爵か……」

素っ気ないリュシオンの態度にも動じることなく、アイヴァンは口を開いた。

「最近、殿下の愛想笑いもやっと板についてきたと思っただけですが、そのしかめっ面はよろしくありませんね」

「そうへらへらと笑ってばかりいられるか」

リュシオンは、口では咎めつつも面白がるアイヴァンを睨みつけたが、当の本人はそれに対し軽く肩を竦めるだけだった。彼は一步リュシオンへと近づき、そっと耳打ちする。

「愛想笑いでも人は簡単に騙されます。隙を作るのはよろしくありませんが、意図して作った隙は様々な情報をもたらしてくれるものですよ？」

言いたいことを言っただけでアイヴァンが離れると、リュシオンはニヤリと彼に笑ってみせた。

「そうだな。ここに良い見本がいる。見習わせてもらおう」

「光栄ですな」

皮肉をすまし顔で受け止めると、アイヴァンは近づいてくる貴族へ微笑みかける。

それが、近づいてくる煩わしい貴族たちをさりげなくリュシオンから引き離し、さらに自分の方へ引きつけてくれるための行動だと理解すると、リュシオンは表情を緩めた。

リヒトルーチェ公爵はその端正な容貌と柔らかな物腰、公明正大な人柄でクレセニア王国きつて

の紳士として知られている。だが実はその一方で、敵と認めた者には容赦がなく、穏やかな笑顔の裏で常に相手の胸のうちを探っているような腹黒い人物だと知る者は少ない。

彼が気を許すのは家族、そしてほんの少数の少数の人間にだけだ。その少数の側に自分が含まれることがリュシオンには誇らしく、また幸運だとも思っていた。

(忠告はありがたく受け取るとしよう)

リュシオンは不機嫌な表情を隠して笑顔を作ると、近づいてくる貴族たちに向き直った。

「おおっ、これはリュシオン殿下!!」

話していた紳士を押しよけるようにして、一人の男がリュシオンの前へと姿を現した。彼はその様子に小さく眉を上げると、男の素性をすばやく記憶から引き出した。

(確か、ラーギ男爵……)

ラーギ家は元々北方の下級地主であったが、現当主から数えて二代前に、戦功によって男爵位を賜った新興貴族だ。先々代の勇猛な逸話とは裏腹に、現当主は馬に乗るのさえ一苦勞であろう体型の男で、武勇ではなくその商才で知られていた。

「リュシオン殿下、今宵はまことに素晴らしい宴でございますな」

勢い込んで話しかけてくるラーギに、リュシオンはそっけなくうなずいて返す。何代も続く男爵家とは違い、ラーギは新興の下位貴族のため、今夜のように王宮に招かれる機会は極めて少ない。

しかしそんなことは気にしていないのか、彼の態度はここに集うどの上位貴族よりも、よほど馴れ

馴れしいものだった。

「せっかくの夜会だ。楽しんでくれれば国王陛下も喜ぶだろう」

リュシオンが上品に微笑むと、ラーギは思わず見惚れて顔を赤らめた。その様子にリュシオンは微かに顔を顰めるが、ラーギはそれに気づくことなく、それどころか興奮気味に隣に控えていた娘を、彼の前へと押し出した。

「これは僕の娘でアンナと申します。今年十八になったばかりです。ほら、アンナ。殿下にご挨拶をしなさい」

ラーギに促されたアンナは、頬を染めながら腰を折ってリュシオンに礼をとった。

「アンナと申します。今宵はこのような素敵な夜会にご招待いただきありがとうございます」

口上を述べるアンナへ「ああ」と素っ気なくうなずいたリュシオンは、そのままその場を立ち去ろうと試みた。しかしそれを阻止するようにラーギが彼の進行方向を巨体で遮り、同時にわざとらしく近くにいた知り合いへと声をかけた。

「おおっ、これはクロード殿！ 久しぶりでございますな」

王太子をないがしろにして知り合いに声をかけるなど無礼この上なかったが、リュシオンはこの場を去る好機だと思い、無言で踵を返そうとした。が、どうしても彼を解放したくないらしいラーギは、今度は知人を置き去りにすると、リュシオンへ向き直り早口で捲くし立てた。

「殿下、娘のことをよろしくお願いいたします。なにしろ社交の場に慣れておりません気弱な娘で、いや、年も近い。きつと話も合うことでしょう」

「まあ、殿下とお話できるなんて光栄ですわ」

(……タヌキ親父が)

愛想笑いを崩壊させかけながらも、リュシオンは意思の力でなんとか笑顔を維持する。その間にラーギは重そうな身体を驚くほど機敏に動かすと、娘を置いてその場から立ち去っていった。

(さて、どうしたものか……)

リュシオンは目の前の男爵令嬢を見やると、小さくため息をついた。

社交界デビュー直後の若い娘らしく、清楚さを醸し出す白のドレスではあるが、胸元が大きく開いた大胆なデザインで、こぼれそうなふくらみを自慢げに覗かせている、慎みのないものだ。良識ある貴婦人たちがその装いに眉を顰めているにもかかわらず、アンナは気にした様子もなく微笑んでいた。

(どこが社交に慣れてない気弱な娘だ！)

見るからに厄介なタイプを前にして、リュシオンは愛想笑いの限界を感じていた。だがその心の内など知る由もないアンナは、彼の手を両手で握ると潤んだ上目遣いでリュシオンを見上げた。彼女の眼差しには、自分に対する絶対の自信が垣間見える。

「殿下、わたくし少し気分が……。よろしければゆっくり出来る場所にお連れただけませんか？」

苦しげに、しかし醜くはならぬように計算された表情で縋りついてくるアンナを、リュシオンは苦々しく見下ろした。

(あのタヌキ親父の娘にしては美しいかもしれないが……態度はまるで娼婦だな)

彼はそうアンナを扱き下ろすと、彼女の胸元に押し付けられるようになっていた腕を冷静に引き抜き、通りがかった給仕に声をかけた。

「こちらのご令嬢の気分がすぐれないそうだ。休憩できる場所へ案内してやれ」
「え？」

「はっ、かしこまりました」

呆然とするアンナの顔に吹き出しそうになりながら、リュシオンは思ったよりも首尾よくかわせたことに満足し、「では」と足早にその場を去った。

(あんな手管にひっかかってたまるか)

フォン大陸の列強の一つに数えられるクレセニア王国。その国唯一の男子にして世継ぎの王子というのがリュシオンの立場だ。さらに容姿と才にも恵まれているとすれば、それなりの身分を持つ娘親たちの野心の対象になるのも必然。たとえその強大な魔力ゆえに恐れられていようとも、それらの者たちの下心が抑制されることはなかった。あわよくば既成事実を作ってしまう、などと思う輩も一人や二人ではない。

もちろん彼自身はそれに乗るほど馬鹿でも迂闊でもなかったし、もし相手が涙で同情を誘おうが、それに流されるほど甘くもなかった。

「あんな女を傍に……ましてや未来の王妃などに据えられるかつ」

そう自らが吐き捨てる言葉で、現在王妃として君臨する人物を否応なく思い出し、リュシオンは忌々しげに唸る。そのまま気分転換にテラスへ出ようとした彼は、後ろからかけられた声に足を止

めた。

「どこへ行くつもりかしら？ リュシオン」

刹那、リュシオンは嫌悪で身体を強張らせる。だがすぐに立ち直ると、愛想笑いを浮かべてから振り返った。

「これは義母上。宴を大変楽しませているようで、ご機嫌麗しく」

丁寧な、けれどまったく心のこもっていない態度で、リュシオンは継母へ挨拶した。

赤味がかかった茶色の髪と瞳を強調するような、金糸、銀糸で細かな刺繍を施した豪華なドレスを纏った王妃は、義理の息子からの嫌味な挨拶に毗を上げると、腹立たしげな態度で口を開いた。

「ええ、ええ。本当に楽しい夜だわ。それにわたくしがつまらない顔をしていては、招待した者も宴を楽しめないのでからね。そうじゃなくて？」

「そうですね。その通りですとも。ですがどうぞご自分が主催される宴のように、破目を外しすぎないようにお願いします」

「なんですって！」

皮肉をあっさりと返され、王妃は取り繕った平静さを放り出した。だがリュシオンはそんな彼女へにこやかに言葉を重ねた。

「ああ、申し訳ありません。義母上の催す宴の盛況さについては、あちこちから色々と耳に入ってくるもので。それから先ほどの答えですが、少しばかり人に酔ったようなので庭園に行こうとしていたのです。では、これにて失礼させていただきます」

当て擦りに顔を真つ赤にした王妃が何も言えないうちに、リュシオンは笑顔のままその場を去ると、表情とは裏腹に近寄り難いオーラを振りまきながら、今度こそ開放されたテラスへと消えた。

十

「受け流すにはまだまだ未熟か……」

テラスからさらに暗い庭園に下りると、リュシオンは自嘲するように独りごちた。

義理の母である現王妃キーラは、前王妃の息子であり、世継ぎの王子であるリュシオンを疎んじている——それは周知の事実であり、そういった感情を実際に向けられるリュシオンが気づかないはずもなかった。

そんな生さぬ仲の王妃が、自分に対してどんな態度をとろうとも、彼としては受け流すのが最良の策だとわかっている。

だが理解していたとしても、実際にそう振る舞うのはまだ年若いリュシオンにとって難しいものだ。つい感情が先走り、先ほどのように言い返してしまう場面も多い。もつとも反省するのは自分の未熟な態度であり、放った言葉の内容についてはないのだが。

庭園を歩き続け、大広間の喧騒が随分と遠のいた頃、宵闇の中でリュシオンはその足を止めた。

「そろそろ出てきたらどうだ？」

大きくリュシオンが声をあげると、微かな足音と共に、今にも闇に同化しそうな黒ずくめの集団

が姿を現した。彼は素早く自分を取り囲む賊たちを冷静に目で追った。

(三、四……六人か)

「俺たちに気づいてて、わざと一人になったってことか？」

「中々肝が据わった王子様だなあ」

自分たちの圧倒的優位な状況の下、男たちは嘲るように話しながらリュシオンとの距離を縮めてくる。闇の中、近づく賊たちの手にキラリと光る銀色の刀身が光るのが目に入った。だがリュシオンは慌てることなく平然と言い放つ。

「クレセニア王太子リュシオン・クレセニアと知っての狼藉か？」

「もちろんさ。よくわかってるとも」

リュシオンの問いに軽々しい口調で賊の一人が答える。

「……いいだろう。死ぬ覚悟があるならかかって来い！ 『シ・ケージ』！」

答えると共にリュシオンは防御や強化、治癒といった白魔法のうち、自身の身体を一時的に強化する〈身体強化〉の魔法を唱えた。それと同時に大きく一歩踏み出すと、彼は目の前にいた男の胸に掌底を打ち込む。油断していたところに魔法で威力を増した攻撃を喰らい、男は耐え切れずに後ろに吹っ飛んだ。

「なっ！」

「おいっ、油断するなっ！」

突き飛ばされた相手は倒れ込み、呻き声をあげるとそのまま気を失った。

「全員でかかるぞ！」

リーダーらしき男が声をあげると、呆気にとられていた全員が瞬時に体勢を立て直した。その統制された動きから彼らがこういつた仕事——暗殺を生業にする者たちだとわかる。

「せめて剣があれば……な」

油断なく武器を構えて取り囲む敵の前に、リュシオンが小さくつぶやく。それを聞いた周りの男たちは勝ち誇り、下卑た笑い声をあげた。

「ハッ、丸腰ではなあ」

「いくら魔力があっても、この人数では詠唱する前にやられちまうだろうしな」

「よしよし、せめてもの慈悲だ。一瞬で冥界へと送ってやろう」

好き勝手な言葉を無言で聞いていたリュシオンは、それらが終わるのを待って口を開いた。

「言いたいことはそれだけか？」

自らの劣勢を気にすることもない落ち着いた声音に、賊たちが気色ばむ。

「生意気な王子様だぜ。さっさと死んでもらおう！」

気を取り直すようにリーダー格の男が叫び、それを合図に他の者も一斉にリュシオンへと襲いかかった。凶刃が、リュシオンへと届く——その時。

『エラン・リデ・リューム』

「うわあっ！」

暗闇に白い軌跡を描き、氷の矢が男たちへと次々に襲いかかる。彼が唱えたのは一瞬にして空気

中の水分を凍らせ、無数の矢とする中位の攻撃魔法——いわゆる黒魔法だった。それは比較的簡易な魔法だが、唱える術者の魔力によって矢の数も威力も変わるため、強大な魔力を持つリュシオンが唱えれば、中位といえど侮れないものとなる。

飛んでくる無数の氷の矢に、男たちは咄嗟に攻撃から防御へと体勢を切り替えたが、人が放つ矢とは違い、魔力を帯びたそれは勢いを削られることはない。意志を持つかのように容赦なく相手を追い詰め、払い損ねた氷の矢は嫌な音を立てて次々と賊たちの身体へと突き刺さった。

「ぐあっ」

数秒後に攻撃が止むと、最初に気を失った男を除く五人のうち、三人が下肢や腹部を貫かれて倒れ込み、残りの二人は満身創痍の状態で立っていた。

「依頼人は誰だ？」

冷淡な眼差しを向けられ、尋ねられた男は息を呑む。今すぐ依頼者を告げて命乞いをしたい衝動にかられ、彼は開きそうになる自らの唇を必死に引き結んだ。

「……言えないか。まあいい」

リュシオンは興味を無くしたかのように独りごちると、男から目を逸らす。その瞬間、比較的軽傷だったもう一人が、短剣を手に彼へと飛びかかった。

男の持つ短剣はまっすぐリュシオンの首筋を狙っており、数秒後には間違いなくその頸動脈を掻き切ると思われた。しかし——

『リゲ・ソルム』

リュシオンの冷静な詠唱と共に、彼の手のひらに現れた炎球が風を纏い、短剣を持つ男へと飛んでいった。

「ぐあああっ!!」

炎球は狙いを違えることなく男の顔へと命中すると、黒い覆面ごとその顔を焼きながら、衰えない威力でその身体を仲間の下へと弾き飛ばした。

どさりと足元に男が倒れ込むと、彼の仲間たちは恐怖に顔を引き攣らせた。

「な、なんだこいつは……」

怯えながらそう漏らした男を無視し、リュシオンは離れた場所で気絶している男を見やった。

「せめて剣があれば手加減してやったんだがな……まあいい。一人いれば十分だ」

その言葉に彼らは先ほどの弱音らしきものが、実は正反対の意味であったことを悟った。それと同時に「一人いれば」の意味も正確に理解したのであった。

—— 一人生かせば十分。残りの運命は死、だと。

恐怖に目を見開き、リュシオンを凝視するばかりの男たちを余所に、彼はゆっくりと片手を上げると魔法語を唱えた。

『ラル・イーデ・セル・カリアス』

リュシオンの詠唱と共に、彼らの周りを白い光が走り、檻のような〈結界〉を作り出す。それは光の像を結び、すぐに跡形もなく消えた。しかし男たちが我に返って逃げ出そうとすれば、その不可視の壁が彼らの行く手を確かに塞いでいるのだ。

『リグ・ジラード・ソル……』

囁くような静かな声が呪文を紡ぐ。それがどんな魔法であるかは彼らに察することはできなかつたが、渦巻く大きな魔力は十分に感じ取れた。

「や、やめてくれっ」

「い、命だけは……」

必死に言い募る彼らは、すでに冷酷な暗殺者ではなく、今まで殺めてきた幾多の者たちの最期と同じ、命乞いをする一人の人間でしかなかった。

怯える者を嘲り、時にさらなる恐怖を与えて殺してきた男たちは、完全なる敗者の立場に置かれて初めて彼らの心を—— 命乞いし、財産や身体を差し出しても生きたいと思う気持ちを理解した。

だがそれがわかったところでもう遅い。『因果応報』、その意味を彼らは身をもって知ることになったのだ。

『……エリテ・フラウ……』

「や、やめっ……」

「いや、だ……死にたくねえ」

震える声で懇願する者たちに、リュシオンは感情のない静かな目を向けたまま詠唱を続ける。

そして——

『……トラン・バル・ラーダ』

詠唱が完結すると同時に、結界で作られた檻の中で爆発が起こると、容赦のない業火が彼らに襲

いかかる。炎は中の者たちを一人、二人と呑み込み、さらに燃え上がっていった。

「化け……も……の」

炎に包まれながら、一人の男がリュシオンに向かって吐き捨てる。リュシオンは表情を崩すことなく、黒い炭となる人間たちを見つめながら小さくつぶやいた。

「……化け物……か」

賊たちがリュシオンに葬り去られ、幾許かの時間がたった頃。

「リュシオン殿下！」

遅まきながら騒ぎに気づいたのか、アイヴァンが数人の近衛兵を連れて駆け寄ってきた。

「遅かったな」

「まったく……無茶をされる」

咎めだてるアイヴァンにリュシオンは苦笑を返す。だが辺りの惨状を目にした近衛兵の表情から畏怖や脅威を見て取ると、彼の顔からスツと表情が消えた。

リュシオンの小さな変化に目敏く気づいたアイヴァンは、その場にいた兵士たちに活を入れるように鋭く声を発した。

「その賊を牢へ。命を絶たれないよう、仕込んでいる毒も徹底的に調べる。歯、一本からだ!!」

「はいっ」

「必ず依頼主を吐かせろ。他の者は死体を速やかに処理した後、厳重な警戒態勢を取れ。王宮内に

賊の侵入を許すなど言語道断だ！ 警備を任された近衛の面目にかけても、真相究明をしなければならぬ!!」

「はっ！」

兵士たちはアイヴァンの鋭い指示で職務を思い出したのか、呆けていた意識を取り戻すとキビキビと動き出した。

「助かった」

落ち着きを取り戻した近衛兵たちの様子を見つつ、リュシオンは小さく言った。アイヴァンはそんな彼の二の腕に軽く手を触れると、真摯な目を向けて謝罪の言葉を口にした。

「申し訳ございません、殿下。駆けつけるのが遅くなりました」

「気にするな。近衛の奴らが追いつくのを待たずに外に出たのは俺の勝手だ。もっともそのおかげで上手いことネズミをおびき出せたわけだ。結果としては上々じゃないか」

「それでも……率先して貴方が手を汚す必要はなかったはずです」

苦渋の滲むアイヴァンの言葉に、リュシオンはフツと口元を緩める。

「今さら……今さらだ。俺の手が血に染まるのがクレセニアの安寧の代償ならば、俺は何度でもこの手を血に染める。それだけの覚悟はあるつもりだ」

「リュシオン殿下……」

「それが国を担う者の宿命だと思っている」

きつぱりと迷いなく述べられた決意。それだけ言い残すと、リュシオンは振り返ることなくその

リュシオンが庭園から王宮へと戻ると、先ほどの騒ぎなどまるで嘘のように、大広間では華やかな宴が続いていた。

一瞬躊躇した後、彼はテラスへの階段をゆっくりと上った。だがそこから大広間へ入る気にはならず、手すりに身体を預け、中の様子をぼんやりと眺めていた。

(この中で笑っている奴らの中に、あれを寄越した者がいるはず……)

リュシオンは宴を楽しむ貴族たちの様子を見ながら、自分を狙った賊が誰の手の者なのかと考え込んだ。王に忠誠を誓いながらも、自らの欲を満たすため平然と裏切り行為を働く者たち。そんな腐った輩が、平和と言われるクレセニア王国にも確かに存在しているのだ。

(今日の失敗を知らされれば、さぞ肝を冷やすことだろう。そこで馬鹿な行動でもして墓穴を掘ってくればいいのだが……)

これ以上考えても仕方ないと大広間から目を逸らそうとしたリュシオンは、新たにテラスへと出てきた人物に気がついた。

「父上!？」

クレセニア国王であり、彼の父バートランド・カール・クレセニアの姿に、リュシオンは驚きの

声をあげた。

「こんなところで休憩か？」

リュシオンと同じ豊かな黒髪、整ってはいるが精悍で野生的な顔立ち。その顔をニヤリと歪ませて声をかけてくる父王に、リュシオンはわざとらしくため息をついた。

「それはこっちのセリフだ……ホストがこんなところで何をしているんだか」

「堅いことを言うな。陳情に見せかけた利益追求の話ばかりを聞いてると、頭がおかしくなるといふものだ」

そう言ってお手上げとばかりに両手を上げながら肩を竦めた王は、不意に表情を引き締めるとリュシオンに問いかけた。

「賊に襲われたそうだな」

「ああ。雑魚だが」

事も無げに答える息子に「ふむ」とうなずき、国王は話を続ける。

「捕らえた者が、どこまで情報を持っているかだな。たいしたもののは出てこないだろうが、最悪依頼主だけでもわかればいい」

「人がせつかく罔になつたんだ。死なせるようなヘマはやめてくれ」

「もちろんだ。それにしても……」

息子の生意気な言い草に苦笑した父王は、ふと言葉を止めて彼の肩に手を置いた。

「無茶はするな。おまえが思うより、多くの人間がおまえのことを心配していると知れ」

リュシオンはその言葉に束の間呆けた後、慌てて顔を背けた。
「わかってる」

小さく発せられたものの、はつきりと耳に入ってきた言葉に国王は頬を緩ませた。

「ならいいが……このことを知ったら、可愛らしいどこぞの姫が、間違はなく心配するからなあ」
ニヤニヤと余計なことを付け足した父に、リュシオンは心底うんざりした視線を向ける。

「誰のことだか」

リュシオンは脳裏に一人の少女を思い浮かべつつもそう嘯く。だがそう言った彼の表情は先ほどまでとは打って変わり、目に見えて柔らかくなっていた。

息子の様子にニヤつきながらも、王は彼と同じく幼い姫へと思いを馳せた。

(リュシオンにとつての『救い』であり、『癒し』か……)

「ククッ……まあいい。それよりキーラに何か言ったのか?」

父の口から出た継母の名に再び顔を顰めつつ、リュシオンは無言で先の言葉を促す。

「そう睨むな。あれがふりふりと怒っていたのでな。どうせまたぶつかったのだろうと思っただけだ」
「わかってるなら訊く必要などないだろうに。……それからあの人の不機嫌の原因は、俺だけじゃなく父上にも十分あると思うが?」

「まあいいさ。不機嫌だけなら可愛いものだ。そう、不機嫌程度ならな……」

表情を消した国王をリュシオンは無言で見つめる。そんな息子の視線に気づいたのか、王はニッと悪戯つぽく笑ってみせた。

「もうすぐ豊穰祭がある。しかも今年は大祭だ。色々と楽しみではないか?」

「また何か企んでるのか……」

呆れたような息子の言葉に「頻り豪快な笑い声をあげると、彼は片目を瞑って告げた。

「人聞きの悪いことを言うな。俺は俺の役割を果たしているだけだ」

「役割?」

「ああ、『後見人』としての、な」

胸を張る国王に、リュシオンは内心頭を抱える思いだった。そして近い内に面倒ごとに巻き込まれるであろう、国王の『被後見人』へと思いを馳せた。

+

今なお続く宴のざわめきが微かに聞こえてくる、王宮の奥まった一室。部屋の入口近くで一組の男女がきつく抱き合っていた。

「王妃陛下は気分が優れなかったのではないか?」

男は腕の中の女に笑顔を見せると、勿体ぶった口調で語りかけた。

「そうよ。忌々しいリュシオンのせいだ……」

「なるほど、不機嫌の理由はやはりあの王子というわけか」

納得したとばかりに男はうなずきながら、王妃——キーラの肩を抱いてソファへと座らせる。そ

して自分は近くにあったコンソールテーブルへと向かうと、そこに置かれたボトルから果実酒を二つの杯に移した。彼は両手に杯を持ったままキーラの横に腰掛けると、片方を彼女へと差し出し、二人は互いに杯を軽く触れ合わせると、同時にそれを啣った。

「気分は落ち着いたか？」

「少しだけ、ね」

笑みもなく答えたキーラをニヤリと笑って見つめた後、男は口を開いた。

「そういえば、興味深い噂を聞いた」

「噂？」

彼女の興味を引けたのを察し、彼は得意げに話し始める。

「王子のことだ。どうやら最近リヒトルーチェの娘と懇意にしているらしい」

「リヒトルーチェ公爵の？」

「そうだ。確か末の娘……ルーナレシアといったか」

「なんですって？ リヒトルーチェの小娘といえば、陛下が後見している娘じゃないの」

咄を上げて睨むキーラの肩を軽く叩き、男は殊更優しい声で彼女を宥める。

「まあ落ち着け。だが面白いと思わないか？」

「何が……」

「どんな貴族令嬢からの誘惑も冷たく振り払っていた王子が、まだ幼い公爵家の娘には気を許してゐるらしい」

「それは本当に確かなの？」

数多の娘が将来の王妃という地位を狙い、リュシオンに近づこうと躍起になっている。だがそんな迷惑などお構いなしに、当の本人は近づく娘たちを氷の眼差しでもって撃退してきたのだ。

だからこそ彼が気を許す娘の存在など、キーラには信じられないものだった。

「本当だ。王子宮に頻繁に招かれているようだし、庭で仲良く話しているのを見た者も多い」

「仲良く？」

「ああ。信じられないことに、その時の王子は機嫌良く微笑んでいたらしいぞ」

「ありえないわ。でもよりによってリヒトルーチェ公爵家の娘だなんて……。もしかして陛下がその娘の後見人になったのは、リュシオンの妃にするための足固めだったんじゃないかしら」

キーラは眉間に皺を寄せて不安を口にした。

もしも次期国王の妃にリヒトルーチェ公爵の娘が選ばれることになれば、王家と公爵家の絆はさらに磐石なものとなるだろう。婚姻により国王が公然と公爵家の後ろ盾を得られれば、王に不満を持つ者は太刀打ちなどできなくなる。それは造反を企む者たちにとって回避したい事態だ。

「その娘、邪魔ね」

そそのかすように彼女の口からつぶやかれた言葉に、男はニヤリと口を歪めた。

「そうだな。なあ、たとえば噂の令嬢が害されたらどうなると思う？」

耳元で囁かれた言葉に、キーラは一瞬目を見開き、次いで楽しそうに笑い出した。

「面白いことになるわ。そう、とても面白いことに……」

男は彼女の肩を引き寄せると、喉の奥で笑いながら彼女を煽った。

「上手くいけば、王子だけではなく、公爵にも一泡吹かせられるな」

「ええ。考えるだけでも、なんて楽しいのかしら」

「怖い女だ」

そう漏らす相手の頬に手を置くと、キーラはじっと彼の目を見つめた。

「ねえ、わたくしのために邪魔者を消してくれるでしょう？」

彼女の言葉を聞くと、男はニヤリと笑う。

「そうだな……だが、まあ待て」

「待て？ 嫌だと言うの？」

逃げ腰とも取れる男の言葉に、キーラはキッと彼を睨みつけた。だがそんな態度にも慌てることなく男は宥めるように彼女へ顔を寄せた。

「話は最後まで聞くものだ。俺が言いたいのは、まだ手を出す時じゃないということだ」

「どういふこと？」

「馬鹿な輩がつい先ほど王子へ安易に手を出した。暗殺者を雇ってな。しかも間抜けなことに失敗したらしい……今頃依頼主はさぞ戦々恐々としていることだろう。そういうわけで、しばらくは大つばらに動くのは避けなければならなくなった」

黙って耳を傾けていたキーラは、男の説明を聞いて不満そうに声を荒らげた。

「だから何もしないというの？ そんなの嫌よ！」

「わかってる。黙って見ているとは誰も言っていないだろう？ 要するに俺たちが直接手を出さなければいいのさ」

男の意図がやつと理解できたのか、キーラはゆるゆると口角を上げた。

「そうね。わたくしたちの手を煩わすまでもないわ」

「ああ。俺たちは愚かで哀れな人形を、後ろで操ってればいい」

「そしていざとなれば、糸を切って生贄に人形を差し出せばいいというわけね」

「そういうことだ」

うなずいた男の耳に顔を寄せると、キーラはかすれた声で耳打ちした。

「ねえ、貴方はそんな愚かな人形に心当たりがあるかしら？」

「いなくはないが、今は動きにくいな。そっちはどうだ？」

「素敵に踊ってくれそうな人形がいるわ。愚かで可愛い人形が……。今回は彼女に舞台を用意してあげましょうよ」

酷薄な笑みを浮かべ、キーラは真っ赤に染められた爪で男の頬をなぞる。

「そうだな。あとは俺たちがどう上手く操るか……か」

男は薄ら笑いで答えると、近づいてきた赤い唇に自分のそれを押し付けた。

クレセニア王宮の北端には、妃の宮と呼ばれる建物がある。

それは歴代の王妃のために建てられた宮殿で、現在はクレセニア国王妃キーラが、その娘ネイディアと共に暮らしていた。

妃の宮の最奥、王妃の部屋とは正反対の方向にネイディア王女の部屋がある。白とスモークピンクでまとめられた室内には、部屋の主と共に従姉であるネグロ侯爵令嬢マヌエラの姿があった。

「まだですか？」

急かすようなマヌエラの声に、ネイディアは困惑に眉を寄せてテーブル上の盤を見た。

黒い巻き毛に紅茶色の瞳をした王女は、髪は橙色、瞳は薄茶色と色彩こそ違うものの、よく似た面差しの従姉を不安そうに見上げた。

「じゃあ、ここ」

ネイディアが盤上に駒を置くと、それを見たマヌエラは勝ち誇った笑みを浮かべて自分の駒を置いた。

「あつ……」

「わたくしの勝ちですわね」

「負けちゃった」

小さな声でネイディアがつぶやくと、マヌエラは横柄な態度でうなずきつつ、とってつけたような慰めの言葉を口にした。

「惜しかったですわね。最後に焦らなければ、もう少しなんとかなったと思いますわ」

「……うん」

自分が焦らせたことを棚上げしたマヌエラの言葉に、けれどネイディアは素直にうなずく。その時彼女の部屋のドアが、ノックもなく開け放たれた。

入ってきたのは夜会の盛装と言ってもおかしくないような、豪華で煌びやかなドレスを纏った女性——クレセニア王妃であり、ネイディアの母であるキーラだった。

「王妃様っ！」

「お母様……」

嬉しそうにキーラを見るマヌエラとは対照的に、ネイディアは戸惑った様子で小さく母を呼んだ。

「来ていたのね、マヌエラ」

「はい」

キーラはチャリと娘を見た後、無言で視線を逸らし、姪であるマヌエラへと話しかけた。

「お兄様はお元氣？」

「元氣ですわ。王妃様にくれぐれもよろしくと言付かっております」

キーラは鷹揚にうなずくと、気だるげにカウチに腰を下ろした。そしてテーブルの上に置かれた盤を見ると気まぐれに問いかけた。

「ゲームをしていたのね……。で、どちらが勝ったのかしら？」

「わたくしですわ、王妃様」

傲慢げにマヌエラが答えると、彼女は冷たい視線を娘に向けながら苛々と捲くし立てた。

「そう。……まったくこの子は誰に似たのかしら？ 頭も悪いし、愚図。おまけに身体まで弱いときてる。小さい頃から利発な子だと言われてきたわたくしとは大違いだわ」

蔑む母の言葉に、ネイディアは黙って顔を俯かせる。マヌエラはキーラの言葉にうなずきはしなかったが、かといって従姉を庇う素振りも見せなかった。

「まあいいわ。マヌエラ、お茶を手配して」

「はい、ただ今」

キーラの言葉にマヌエラはすぐさま返事をする、メイドを呼ぶために呼び鈴を鳴らした。ほどなくしてやってきたメイドたちは、そこに王妃の姿を確認すると、マヌエラに急かされるまま大慌てでお茶の用意を調べた。

キーラとマヌエラが、優雅にお茶を楽しみながら雑談に花を咲かせる横で、ネイディアは静かにそれを眺めている。知らぬ者がその光景を見たのならば、間違いなくマヌエラを王女と思込んだらう。

「そういえば、もうすぐ豊穰祭ね……」

何気なく口にしたキーラの言葉に、マヌエラは思い出したと言わんばかりに勢い込んで訴えた。

「それですわ！ 王妃様、聞いてくださいっ!!」

「一体なんなの？」

マヌエラの態度に眉を蹙めながら、キーラはカップに口をつけ、片手を緩く左右に振って彼女を促した。

「国王陛下のことですわ。豊穰祭のためにと、臣下の娘に御自ら衣装を贈られるとか！」

「臣下の娘……？」

ピクリと眉を上げたキーラに、マヌエラは怯みながらも告げた。

「リヒトルーチェ公爵令嬢ですわ」

「陛下が後見されている娘ね……」

「そ、そうですね、後見人になられたとはいえ、陛下がそこまでなさる必要はありませんわ」少しばかり勢いをそがれながらも、マヌエラは必死に言い募る。キーラは続く彼女の訴えに反応を示すことなく、一つの言葉に気をとられ、視線を空に彷徨わせていた。

「公爵家の娘、ね」

やがてキーラがポツリと零すと、マヌエラは口を尖らせて不満を顕わにした。

「陛下はリヒトルーチェ公爵家をお目に掛けすぎですわ。件の令嬢もそれを笠に着てやりたい放題だなんて！ しかも王女であるネイディア様を差し置いて、陛下がご自分で衣装を選ばれるとか。どうせそれもあの方が我儘をおっしゃったのですわ!!」

マヌエラの言い分を黙って聞いていたキーラは静かにうなずく。たいして愛着のない娘だが、他人の娘が自分の娘より優遇されるというのは、彼女のプライドを著しく傷つけるものだった。

「本当に……。国王に物を強請るなど、なんと凶々しい……。忌々しい娘だこと」
「えっ？」

小さくつぶやかれたキーラの言葉は、二人の少女の耳には届かなかった。聞き返すマヌエラを無視し、彼女は苛立たしげにティーカップを皿へ置いた。

「このままだと、いずれ公爵家の末娘が王太子妃ということになるわね。陛下のみならずリュシオンもその娘を気に入っているようだし」

「そんなっ」

言い放たれた言葉に動揺し、マヌエラは大きな声をあげた。平静を失った彼女を、キーラは一瞥する。

「家柄も問題ない、国王にも王子にも気に入られているとなれば……」

「嫌っ」

考えたくない未来を示唆され、マヌエラは首を振って不安を振り払った。

「国王陛下にまで媚を売るような方は、リュシオン殿下には相応しくありませんわ！」

マヌエラが怒りを込めて叫ぶと、キーラはそれまでの苛立たしげな表情を一変させ、にこりと微笑んだ。

「そうね。……本当はわたくし、リュシオンの伴侶には貴女を陛下に推薦しようと思っていたのよ」

「わ、わたくしを？」

「そう。貴女ならば、リュシオンと年も近い。家柄だって問題ないわ……。それにあの子を慕ってく



れているようだし」

「王妃様！」

感激する姪に、彼女は優しく続けた。

「リュシオンは今でこそ国内有数の魔法使いと言われている。それでもまだ魔力を暴走させて恐れられていた過去を忘れていない者も多いのよ。そんな彼を慕ってくれるなんて、貴女は本当に優しい子ね」

「王妃様、昔のことは存じ上げませんが、わたくし、リュシオン殿下の魔力を恐れたいませんわ。だってあんなに素敵な方ですもの……」

リュシオンの姿を思い浮かべているのか、うっとりとして夢想しているらしいマヌエラに、キーラは冷たい眼差しを向けた。

（馬鹿な子。あれの外見に囚われ、本質をわかっていない。……恐れたりしない？ あれが魔法を使うところを見たこともないくせに。本当に愚かな娘）

心の中でマヌエラを嘲りつつも、キーラは微笑みを浮かべて優しく彼女の手を取った。

「ええ、わかっているわ。可愛い姪のことですもの。わたくしとしてその想い、叶えてやりたいと思うのよ」

「王妃様……」

うっとりとして自分を見つめるマヌエラに、キーラはわざとらしくため息をついた。

「……けれど相手はリヒトルーチェ公爵令嬢。彼女を押し退けてまで貴女をと推す者は少ないかも

しれないわね」

「なんとかならないのですか」

公爵と侯爵。どちらも大貴族とはいえ、その階級差は埋められない。さらにその歴史の古さなどをかんがみれば、両家には歴然とした差がある。

「そうね、正直難しいのは否めないわ。リヒトルーチェ公爵は陛下のお気に入り、そして懐刀。しかも公爵家を味方につけておこうとするのなら、王家にとつてその縁談はまたとないもの」

淡々と事実を述べるキーラに、マヌエラは唇を震わせて俯いた。

「このまま公爵令嬢がつつがなく成人するならば、貴女がリュシオンの伴侶となるのは難しいわね」
ひとり言のようにつぶやかれた彼女の言葉は、けれどマヌエラの中に棘のようにしっかりと突き刺さった。

（あの子が……あの子がいなければ……）

「マヌエラ？」

心配そうにマヌエラを覗き込むネイディアにも応えず、彼女は昏い思考に支配されていく。

「貴女とリュシオンのことは、お兄様にも知らせておくわ。ネグロ侯爵家としても、公爵の力がさらに増すなど歓迎できないことですもの。……そう、わたくしたちは貴女の味方よ」

「王妃様……」

澱のように、マヌエラの心の底に溜まっていくキーラの言葉。彼女は父であるネグロ侯爵を思い浮かべた。

父にとつてリヒトルーチェ公爵はまさに目の上の瘤。若い頃は学問や武芸における優秀さを憎み、爵位を継いでからは、国政での立場やその財力に尽きぬ妬みを抱いていた。

王妃の兄という立場を手に入れてなお、その胸中は何も変わらない。むしろ差が縮まったことでより多くの嫉妬を抱えることになった。そこへ王子の伴侶がよりによつてリヒトルーチェ公爵の娘となればどうなるだろう。

（お父様は、わたくしの味方をしてくれる！）

マヌエラは、自ら導きだした答えに満足すると、キーラへ向けて満面の笑みを浮かべた。

「リヒトルーチェ公爵令嬢が王太子妃になるとは限りませんわ」

「ほう？」

「だって公爵家ともなれば、身に迫る危険も多いですもの。若い彼女が無事に成人できるとは限らないと思いませんか？」

消えかけていた自信を復活させたマヌエラは、瞳に強い意志を覗かせて王妃に問いかけた。

「確かに貴族は何かと狙われるもの。それも敵の多い公爵の娘ともなれば、ね」

「ええ。何が起こるかわかりませんわ。物騒な世の中ですもの……」

クスクスと笑うマヌエラに、キーラは面白そうに眉を上げた。

「そうね。物騒な世の中だわ」

笑い合う二人を、ネイディアは一人、不安げに見つめていた――

第二章 豊穰祭の花姫

まだ神々の息吹が、大陸のあちこちに満ち溢れていた時代。

神々のもたらす豊穰を当たり前のごとくして享受し、人々はその恵みに感謝することを忘れていった。しかし、そんな人間たちの栄華は、長く続くことはなかった。

傲慢になった人間たちに神々は怒り、大陸は未曾有の大災害に襲われたのだ。

日照りが続いて大地は枯れ、かと思えば他方では河川が氾濫する。歩くのもままならないほどの強風が吹き荒ぶところがあるかと思えば、また一方では火の山が灰を降らせた。

災害により人の営みは崩壊し、飢える者が大陸に溢れた。そうして初めて人々は神々の恵みに感謝することを思い出した。しかし時すでに遅く……

自分勝手な人間への神々の怒りは大きく、人間はその前で余りにも無力だった。

そんな中、自らの子とも思う民が、飢え、死んでいくのを嘆く一人の王がいた。

「ああ、どうすれば神々は我らを許し給うのか」

供物を捧げ、寝る間も惜しんで祈りを捧げる王。けれどその祈りに神々が応えることはなかった。万策尽きた王に、臣が言う。

「王よ、失われた儀式を試みるべきかと。神々へ生贄を捧げるのです」

「生贄だど？ 生贄にする家畜などもうおらん」

臣の提案に王は天を仰いでつぶやいた。そもそも家畜など疾うの昔に食料として消えていた。

「家畜ではございませぬ。……人を、です」

「人を……だど？」

「世界を救うためならば、贄となる者もきつと喜びましょう」

「馬鹿を言うな！ 飢え、大切な者を失くし、悲嘆に暮れる民にまだ犠牲を強いるのか！ それなら我が贄となるう!!」

「なりませぬ。王が自ら犠牲になってしまわれたら、誰が国を導くのです」

臣の言葉に王は苦悩する。誰も生贄になどしたくはない。けれどももう何をすれば神々の許しを得られるのか彼にはわからなかったのだ。その時、王に語りかける者たちがいた。

「王よ、わたくしたちが贄となりましょう」

「民にこれ以上の犠牲を強いてはなりません」

「わたくしたちは喜んで民のために死にましょう」

「神の下にいくのです。何も怖くありませんわ」

「王、わたくしたちをどうか」

それは王の五人の娘だった。娘たちの言葉に王はさらに苦悩を深くする。五人の娘は彼が愛してやまない者たちなのだ。

けれど王は決断を下す。民のため、自分のもつとも大切な娘たちを贄とすることに。

「神よ、我が娘の命をもって、愚かな我らをお許し下さい」

王と娘たちの心根の尊さに、怒れる神々の心もついに動かされることとなる。

その日の夜、遍く民の夢に神々が現れたのだ。

『王と娘たちの清き心に免じ、そなたらの願い、聞き届けよう。我らに贄はいらぬ。その代わり五年に一度、娘たちに舞を奉じさせよ』

王はすぐに、神々の要望どおり舞の奉納を執り行うことにした。幸いにも五人の娘たちは舞の名手。贄にならずとも民のために出来ることがあると、五人は喜んで舞の奉納を引き受けた。

やがて神殿で行われた奉納舞の素晴らしさは、神々さえも唸らせるものだった。

一差し舞えば、枯れた大地が芽吹き、もう一差し舞えば、干上がった水場に水が湧き上がった。

舞うごとに河川は穏やかな流れを取り戻し、荒れ狂っていた風はおさまり、燃える火の山は怒りを静めた。

こうして五人の娘が舞い終わると、大地は神々の恵みを取り戻したのだった。

人々は神々の慈悲に深く感謝し、その恵みを忘れぬため、毎年豊穡を感謝し祝うことにした。

そして五年に一度を大祭の年とし、創始の舞姫たちと同じ、五人の娘を選んで神へと舞を奉納することを誓ったのだ。

いつしか五人の舞姫たちは『花姫』と呼ばれ、その奉納舞の儀式は今もなお、サンクトロイメの

各地で続いている。

十

リヒトルーチェ邸の図書室。

パターンと読んでいた本を閉じ、ルーナは「んーっ」と唸りながら両手を前へ突き出した。彼女が読んでいたのは、サンクトロイメで広く知られる豊穰祭についての伝説だ。

「それにしても、神話にありがちなご都合主義というか……。わたしだったらこの臣下を生贄に選んじやうかも。まあ脚色しまくりでこの伝説も事実からはほど遠かったりするんだらうけどね」

ルーナは頬杖をつくど、本の表紙を眺めながら独りごちた。そもそも何故彼女が豊穰祭の伝説に目を通していいのか。それは遡ること数日前――

その日ルーナは、父アイヴァン、そして護衛の少年カインと共に王宮に来ていた。

五歳の時初めて王宮を訪れてから三年。その間に彼女は幾度も王宮に招かれていたが、それはひとえにルーナの後見人という立場を最大限に利用し、彼女に会いたいという我儘を押し通す、この国の王が原因だった。

彼の臣下であり、親友でもあるアイヴァンはそんな国王への苦々しさを隠さなかったが、ルーナ本人は、自分を可愛がってくれる国王に対して嫌悪の情など湧くはずもなく、彼に会うこと自体は

苦痛ではなかった。

(でも王宮に行くのって、無駄に緊張するのよね……)

大抵の場合は人払いを済ませてある場所での謁見になるが、それでも多くの貴族や官吏が集まる王宮だ。小さな子供が歩いていけば嫌でも注目を集める。そういった視線にルーナが慣れることはなかった。

一方王宮側では、国王の被後見人であり、名門リヒトルーチェ公爵家の令嬢が王宮を訪れることに慣れつつあった。それどころか愛らしく行儀の良い彼女は、王宮に勤める官吏たちにとって密かに癒しのマスコットとなり人気を博していたのだ。

ルーナ専用ともいえる王宮の一室にて、彼女とアイヴァン、そしてカインの三人は国王が現れるのを待っていた。

季節柄今は使われていない、白大理石に金細工の装飾を施した暖炉の近くには、ピアートーブルと椅子が三脚、少し離れて三人ほど座れる長椅子が置かれており、公爵はテーブル近くの椅子に、ルーナとカインは長椅子の方に腰掛けていた。

アイボリー色の壁面には、有名画家の作品と思われる大小様々な絵画が飾られており、床にはスイカズラの文様が描かれたファルース絨毯が敷かれている。ファルース絨毯とはフオン大陸の東部に位置するバーレビー公国の、ファルース地方に伝わる手織りの絨毯を指す名称で、その見事さゆえに一枚一枚が芸術品として称えられているものだ。

これらの凝こった内装からも、ルーナがいかに国王の『お気に入り』であるかが見て取れる。
「陛下のご用って何だと思っ？ 父様」

王宮の一室といえど身内しかいないため、ルーナは寛くわんいだ様子で父に問いかけた。

「また何かるくでもない用向きだろう。あれの考えることは、時に突飛とつすぎて予想がつかん」
アイヴァンが娘の問いに苦笑したところで、唐突に部屋のドアが開いた。

「突飛とは失礼だな」

現れたクレセニア国王バートランドがくつくつと笑いながら抗議すると、その後ろに続いたリュシオンが肩を竦すくめて「その通りだろう」とつぶやいた。

国王と王太子の登場に、立ち上がり礼をする三人に対し手を上げて制すると、国王はアイヴァンの隣の椅子へと腰掛けた。

「おまえたちも座れ」

「はい」

王に促うながされ三人が着席すると、残されたもう一脚にリュシオンが腰を下ろす。

「それで？ 今日是一体の用だったんです？」

うんざりとした口調でアイヴァンが口を開くと、国王はニツと笑ってルーナを見た。

（え？ わたし……？）

ルーナが驚きに目を見開くと、彼はハハハッと豪快に笑いながら、彼女たちを招いた用件を話し始めた。

「実はな、来月の豊穰祭のことだ」

豊穰祭とは毎年十一月に行われる、一年の豊穰を神に感謝する祭りのことだ。祭りは毎年それぞれ街や村単位で行われているが、五年に一度の『大祭』の際には、王都の神殿で特別な神事が執とり行われるのだ。

「そういえば今年は大祭か」

つぶやいたアイヴァンに、王はうなずきを返して続けた。

「そこでだな、豊穰祭の花姫をおまえのところの、娘二人に引き受けてもらいたくてな」

「花姫？」

国王の言葉にコテンと首を傾げたルーナへ、リュシオンが説明を加える。

「豊穰祭で舞を奉納する娘のことだ。代々未婚の貴族の娘が五人選ばれる」

「えっ、それをわたしが？」

驚くルーナに、王は満面の笑みを浮かべながらうなずいた。

「ルーナたちなら、さぞや美しい花姫になるだろうな」

「当たり前だ。たまにはおまえも良いことを考えるじゃないか、バート」

「そうだろう？」

（いや待って父様！ 了承しちゃうわけ？）

ルーナは焦ってアイヴァンを見るが、彼はすでに決定事項とばかりに細かい打ち合わせを国王と始めている。

(マジですか……)

ガクツと項垂れるルーナの肩に、隣に座っていたカインが慰めるように手を置いた。彼女はカインへと顔を向けると、その青緑色の瞳を見つめて口を尖らせた。

「陛下の話をわたしがお断りできるわけじゃないじゃん。断れそうな父様はすっかりその気だし」

「……きつと良い思い出になりますよ」

落ちこむルーナに、カインは苦笑しつつ宥めるしかなかった。

しばらくして多少なりとも立ち直ったルーナは、父と国王に向けて疑問を投げかける。

「あの……花姫って舞を奉納するんですよね？」

「そうだな。舞と、その他の細かい作法は、神殿から派遣された者が教えてくれるから、心配はいらないぞ」

(選ばれた時点で心配ですって……)

内心頭を抱えるルーナを余所に、王はパンツと手を叩くと思いついたように声をあげた。

「ああ、そうだそうだ。ルーナの花姫の衣装は俺が用意してやるからな」

「は？」

胸を張って言い渡す国王の言葉に、すぐさま反応したのはアイヴァンだった。愛娘の晴れ舞台の衣装を作ると宣言され、眉を擡めて主君を見る。

「なんでおまえが？ 娘の衣装は私が最高のものを手配する！」

「いいじゃないか、ヴァン。上の娘もいるだろう？ ルーナは譲れ」

「馬鹿を言うな。いやそれ以前に、なんでおまえがルーナの衣装を用意する必要がある？」

「俺はルーナの後见人だからな。それに色々世話になってることだし」

「待て、その言い方はいいからやめろ！」

言い争う国王とアイヴァンに、ルーナ、リュシオン、カインの三人は、無言で呆れ果てた視線を向けた。終わらない争いに、やがてリュシオンがポツリと零す。

「おまえ、無駄に父上に好かれたものだな」

「……はは」

同情が込められたその言葉に、ルーナは乾いた笑いを返すしかない。

「それにしても、陛下の『世話になってる』とは、一体何のことです？」

大人二人のやり取りを傍観していたカインは、不思議そうにルーナに尋ねた。

「あ……なんかね？ 前に手作りのお菓子を差し上げたことがあるの。そしたらすっかりお気に召したみたいで、その後も何度か差し上げたり、陛下のお願いで、作り方を料理長に教えたりしたことじゃないかなあ？」

「なるほど、それですか……」

ルーナの説明に、カインも納得してうなづく。

彼女は公爵邸の厨房で、こっそりとお菓子や料理を作ることがあった——それも度々。

最初はそんなルーナを、貴族令嬢らしからぬ振る舞いをしてるとか、やけどや怪我をしたらどうするなどと皆が心配したものだ。だが彼女が作るものがあまりにも珍しく、そして美味だった

め、やがて咎める者がいなくなってしまうのだ。最後まで眉を顰めていたカインでさえ今では何も言わなくなり、もはや公爵家では彼女の趣味は公然のものとなっていた。もっともルーナとしては、前世で習得した調理技術を披露してただけだったりするのだが。最近では、屋敷の離れにルーナ専用の厨房まで作られ、公爵家の料理長が彼女に教えを受けているほどなのだ。

「ルーナの菓子は凄いで。先日作った『モンブラン』だったか？ あれなど王宮の料理長に一口食べさせたら、ぜひ教えを請いたいと訴えてきたくらいだからな」

いつの間にか近くに来たリュシオンが、長椅子の背もたれに寄りかかりながらカインに教えるのを、ルーナは内心苦笑しながら聞いた。

この世界の菓子といえば、単純な焼き菓子が多い。ルーナの前世——高崎千幸だった頃、バイトとはいえシェフやパティシエに師事して身につけた知識や技術は、サンクトロイメの食に関わる人間にとつて驚異のものなのだ。

（サンクトロイメの栗とおつきくて美味しいんだよね。思わずモンブランとか作っちゃったけど、名前の由来を聞かれて困っちゃったよ。「思いつきで！」とか言つてなんとか誤魔化させたけど……こちらの世界で有名な山の名前、『ロウゼイル』とかつて捏造しようかとも思っただけどね）

自らの発想にクスリと笑ったルーナは、ふと逸れてしまった話題を思い出した。

「それよりですね、花姫ってなんか大変そうなんですけど……」

心配そうにつぶやくルーナを、安心させるようにリュシオンが言った。

「まあ、そんなに気にすることはないぞ、ルーナ。今では未婚の令嬢五人が、社交界デビュー前に

顔見せできる機会としか捉えられていないからな」

「そうなの？ それならやっぱりわたしだと、ちびっ子すぎるんじゃないのかなあ」

通常貴族令嬢は十八歳前後でデビューすることを考えると、十六歳になったばかりのアマリーならば花姫という役目もぴったりだ。だがそれに比べると自分は正直幼すぎるのではないかと、ルーナは思う。

「あー……確かに八歳で花姫に選ばれた令嬢はいないな」

「うっ……なら辞退とか……」

「無理」

「……ですよね」

ルーナがあつと大きなため息をつくとき、リュシオンは彼女の銀髪をクルクルと指に巻きつけながら続けた。

「ま、年齢はともかく、おまえが一番注目を浴びそうだな」

「そうですね」

リュシオンの言葉に、カインもうなずいて同意を示す。ルーナはそんな二人を見て不思議そうに首を傾げた。きよんとした彼女の様子に、リュシオンとカインは思わず表情を緩める。

「なににせよ、父上が決めたんだから諦める」

「うう……」

少しばかり恨めしげにルーナが国王を見ると、彼はその視線を感じたのか彼女の方を見てまた二

ツと笑い、満足そうに言い放った。

「よし、アイヴァンは説得した！ ルーナの衣装は俺が仕立てるからな！」

「あ、ありがとうございます……」

ルーナが引き攣り笑いで礼を言うと、国王は悔しそうな顔をするアイヴァンに、フンと勝ち誇ってみせた。

「ちなみに仕立て屋は頼んである。もう着く頃だろう」

「え？ 今からですか？」

ルーナが驚くと彼は豪快に笑い声をあげ、隣に座るアイヴァンの肩を何度も叩いた。

「来月だからな！ 準備は早い方がいいだろう？」

「……最初からこのつもりで呼んだな？」

アイヴァンの低い声には答えず、王は気まずそうに視線を泳がせた後、じまか誤魔化すようにルーナを見て考える。

「衣装は何色にするべきか……、ルーナならなんでも似合いそうだがな」

「そうだな、白か……」

「いや、青も捨て難い。それとも可愛らしくピンクか？」

（もう、好きにして……）

またしても採め始めた二人を見て大きなため息をつくとき、ルーナは諦めたように肩を落とした。こうして彼女は、来るきた豊穰祭の主役——花姫——を引き受けることになったのだった。

十

回想から我に返ったルーナは、テーブルの上にある本に目をやると、ふうつとため息をついた。「それにしても……」

（花姫って祭りに花を添える『ミス何々』みたいなものだと思ってたのに……）

舞を奉納するのは大変だと思うが、花姫という名称からか、ルーナはその役割を祭りのお飾りのようなものと思っており、正直ここまで歴史ある祭りの花形だったとは考えていなかったのだ。前回の大祭の時は三歳だったため、その認識も仕方がないことなのだが。

「だいたい、花姫は十三歳から十六歳くらいというのが通例なのに、どうして八歳のわたしが選ばれるのよ……」

ルーナが先ほど読んだ本でも、自分のように幼すぎる花姫は異例中の異例だと再確認できた。

（ありえないー。辞退したいー。陛下のばかぁー）

一応一国の王であることを考慮に入れ、ルーナはこんな状況を招いた張本人へ、心の中で叫ぶ。だが不満は解消しきれず、彼女はその感情のままに手足をばたつかせた。

「ちよつといいかしら……？」

「へ？」

手を振り上げ、椅子に座ったまま足を上げた状態のルーナは、自分を呼ぶ声に固まったまま、顔

だけをギギッと声の方向へと向けた。

そこに心底不思議そうな様子で自分を見る姉、アマリーの姿を認め、ルーナは自身の状態——この上なく間抜けな格好——に気づき、一気に顔を赤くした。

「ね、ねね姉様!？」

「はい？」

恥ずかしさのあまりさらに手足をばたつかせるルーナに、首を傾げながらアマリーが近づいてきた。そして彼女はテーブルの上の本に目をやると、ふふつと笑ってみせた。

「豊穰祭の本ね」

「うん……」

眉尻を下げてうなづくルーナの顔を覗きこみ、アマリーは心配そうに声をかける。

「どうしたの？ 元氣ないわね」

「だって姉様っ！ こんなにすごいお祭りだなんて知らなかったもの。それにわたしの年で花姫になるなんて、記録にある限り初めてみたいなの……」

ルーナが勢い込んで訴えると、アマリーは慰めるようにその頭を撫でた。

「そんなこと心配しなくても大丈夫。年齢は慣例というだけで制限ではないのよ？ それに貴女を推薦したのは陛下なんだし。確かに重要な神事だけど、わたしも一緒なんだから安心よ。ね？」

「でもお……」

「ルーナが嫌だなんて悲しいわ……。わたしは一緒に花姫ができるって喜んでいたので」

「うっ……」

悲しそうに目を伏せるアマリーに、ルーナの良心はチクチクどころか、ズキズキと痛む。

「そ、そうだよ！ 姉様と一緒にだもん。わたし頑張るよ！」

「本当？ それなら嬉しいわ」

ルーナの答えを聞くと、アマリーは途端に満面の笑みを浮かべる。それを見て若干乗せられた気もしないではないルーナだったが、「姉様が喜んでくれるのならいいか」と納得することにした。

(そうだよ。姉様と一緒にだし……楽しめばいいのかも)

ルーナが開き直ると、好奇心が顔を出してきた。それを満たすため、彼女は張り切ってアマリーを質問攻めにし始めたのだった。

「豊穰祭の花姫ってどうして花姫っていうの？ 舞ってどんなの？ それから——」

アマリーは次第に興奮気味になるルーナに面喰らったようだが、すぐに余裕の笑みで質問に答え出す。

「豊穰祭に選ばれる五人の娘はね、それぞれのイメージに合った花で冠や飾りを作るの。そこから花姫と呼ばれるようになったのよ」

「なんか素敵だね。わたしの花は陛下が選ばれるのかな？」

「きつとそうね。どんなのかしら」

「どんなのだろうねえ。わたしも姉様の衣装が気になるなあ」

「せっかくだから本番まで、お互い内緒にしておきましょう」

アマリーの言葉に、単純なルーナは俄然豊穰祭が待ち遠しくなってきた。

「それから舞のことだけど、奉納舞は神秘的でとても美しいものよ。数千年の間、舞われ続けてきたものだよ。今から習うのが楽しみだよ」

「数千年って……そんなのを習えるなんてすごいことかも」

「ええ。一緒に頑張りましょうね」

「うんっ！ 陛下がおっしゃるには、神殿から作法や舞を指南してくれる方が、わざわざ屋敷に来てくれるんだよ」

「そうみたいね。だからわたしも豊穰祭までは、自宅から学院に通うことになってるわ」

「寮に帰らなくていいの？」

「ええ。だからルーナに会える機会が増えて嬉しいわ」

「わたしも」

アマリーの言葉に、はにかみながらルーナが答えると、アマリーは妹の可愛らしさに悶え、彼女をぎゅうぎゅうと抱きしめた。

(く、苦しい……)

ギブアップとばかりに背中を叩くルーナに、慌てて彼女から離れたアマリーは、誤魔化し笑いをしながら話を振った。

「それにしてもルーナの花姫姿、きつと可愛いでしょうね！」

「うーん……他の花姫のおまけって感じになると思うけどなあ」

「そんなことないわよ。それに陛下が衣装を仕立ててくださるんだし」

「それは確かにありがたいんだけど……」

ルーナが肩を竦めると、アマリーはクスクスと笑い出す。

「きつとルーナの衣装については、陛下と父様の間に熾烈な争いがあったんでしょうね？ 目に浮かぶようだよ」

「姉様すごい！ なんでわかるの？」

「ふふっ。父様が押されて悔しかったんでしょうね」

「そうなの。でもサイズを測る頃には、陛下と一緒に張り切ってたよ」

王宮での国王とアイヴァンのやり取りの後、ルーナは身長や胸まわりどころか、足のサイズまでこと細かく採寸された。しかしそのデザインなどについては、国王と父、そして仕立て屋の間で話し合われるらしく、彼女には一切知らされていないのだ。

「まあっ、陛下も？ 国王陛下って本当にお茶目な方なのね」

アマリーは目を丸くしてそう言った。彼女も国王に会ったことはあるが、その時の彼は威厳に満ちあふれた、まさに王者という印象で、ルーナの話すような意外な一面はどこにも見られなかったのだ。

「そうだね。それにとっても優しくて気さくな方だよ」

微笑んで答えるルーナにアマリーは優しく目を細める。

「ふふっ、ルーナは国王陛下にも、王太子殿下にも可愛がられていて、わたしも鼻が高いわ」

「そ、そうかな？」

「そうよ」

アマリーは心から嬉しそうに言うと、ルーナの艶やかな髪を優しく撫でた。

(我が姉ながら、アマリー姉様ってほんとに素敵な女の子だよね……)

妹が姉を差し置いて一国の王に鬮^{ひい}肩^{かみ}されている。そんな状況にもかかわらず、まったく妬^{ねた}むことなく自慢に思ってくれる人間がどれほどいるだろうか。

(わたしの最大の幸せは、こんな家族に恵まれたことだよね)

それは前世において、天涯孤独で家族の愛を知らなかった千幸、すなわちルーナの、『絶対に忘れてはいけない、大事なこと』なのだ。

「どうしたの、ルーナ？」

不意に黙り込んだルーナに、アマリーは首を傾げて心配そうに尋ねる。彼女はふるふると首を振ると、にっこりと微笑んだ。

「んーん。姉様、大好きよ」

ルーナから突然贈られた言葉に、アマリーはまた嬉しそうに微笑み返した――

十

クレセニアの王都ライデルの西には、街のシンボルともなっている大神殿がある。

創世の五柱神^{ごちゅうしん}を奉る神殿はフォーン大陸の各地に数多^{あまた}あるが、その中でもクレセニア王都の大神殿は大陸の三大神殿に数えられるほど立派なものだ。建立^{けんりゅう}されて三千年以上とも言われる歴史の古さと、長い時を経てもなお損なわれることのない美しさと荘厳さをもって、人々の信仰の中心として存在し続けている。

神殿前の階段を上り、中に入るとすぐに、祈りの間と呼ばれる礼拝のための広間がある。そこでは一般の参拝者^{ひざまつ}が跪^{ひざまず}いて熱心に祈りを捧げている。

白大理石の床に、細かな彫刻が刻まれたいくつもの円い柱。天井部分にも彫刻や金箔などで意匠^{いせう}が施^{ほどこ}されており、美術的にも価値がある広間だ。正面には二百年ほど前に活躍した、天才彫刻家マルク作の五柱神の巨像が、人々を見下ろすように安置されている。

中央に父なる神にして、死と転生を司る冥界^{めいがい}の主でもある大神シュト。

その右横には母なる神であり、生命と豊穰^{とよこぼ}を司る慈愛の女神セーレ。

シュト像の左隣には叡智^{えいち}と勝利を司る太陽神ソレス。

さらにその左にはソレス神の妹神であり、魔力と治癒を司る麗しの月神ルナリス。

そしてセーレ像の右隣には、すべての水を司り、旅人の守護神でもある海神ダール像があった。

これら五柱の神が、サンクトロイメの創世に関わる神として、フォーン大陸で特に広く信仰されているのだ。

「わあ……」

祈りの間の高い天井を見上げた後、正面の神像に目を向けて、ルーナは感嘆の声をあげた。呆気に取られたように立ち尽くす彼女の様子に、アマリーは笑いながらその手を引いて先を促す。

「ルーナ、見学は後よ？」

「はい」

姉妹の微笑ましいやり取りに、周りを囲むリヒトルーチェ家の護衛たちは目を細めつつも、油断なく周囲に気を配っていた。

今日ルーナたちは、豊穰祭に向けて『承認の儀式』を受けることになっている。選ばれた少女たちは本日、国の最上位神官である神官長によって承認されることにより、正式に花姫となるのだ。

すでに神殿より派遣された神官によって、祭りの作法などを一通り学んだ少女たちだが、この式典を終えて初めて、やっと本格的に奉納舞を学ぶことが出来るようになる。

さらに彼女たちは、豊穰祭までの期間中、上位神官と同じ身分が与えられ、祈りの間などがある拝殿の奥、すなわち本殿への自由な立ち入りが許されることになるのだ。しかし同時に花姫は、神官と同じく形式的にだが現世の身分を隠すことになる。そのため神殿に付き添うのは、護衛として必要最小限の家人しか認められていない。もちろんそれは公爵家と言えども同じことで、ルーナに常に付き添うカインの姿も、護衛の中に見られなかった。

祈りの間にいた数人の参拝者は、神殿に現れた可憐な少女二人と屈強な男たちの集団を好奇心のまま横目で窺っていたが、公爵家の姉妹はすぐに家人であるその男たちに周りを固められ、そのまま祈りの間の奥へと足早に向かつて行った。

祈りの間と奥への扉の前には警備の神官兵が立っており、侵入者を防いでいる。その横を通りすぎ、ルーナたちは拝殿の広い廊下を歩いていった。天井は幾何学模様の意匠が施された半円形のもので、左右の壁には見事なタペストリーが飾られている。

(一体どこまで行くのかしら?)

ルーナは物珍しさにきよろきよろとあちこちを見回しながら、廊下を進んで行く。やがて曲がり角をいくつか過ぎた頃、彼女たちの前を歩いていた家人が不意に足を止めた。

先頭の者が横へと肩幅程度ずれると、ルーナたちの目の前に一人の女性神官が現れた。

「ようこそ、姫君方。ここからは、私のご案内させていただきます」

深々と頭を下げた神官に姉妹がうなずくと、彼女は微笑み、背を向けてゆっくりと歩き出した。案内されて辿り着いたのは、拝殿にある、がらんとした広間。正面の壇上には、聖なる銀で造られたと思われる演台が中央に配置され、その後ろには壁一面に五柱の神が生き生きと描かれていた。公爵家の姉妹が現れると、先にその場にいた男女が一齐に注目した。神官と思われる男女が三人、アマリーと同じ年恰好の少女が二人、そしてその家人と思われるお仕着せを着た男たちだ。

彼らはルーナたちに視線を向けると、息を呑んだ。

(な、なに？ 遅刻だったのかな?)

静止したままの彼らにじっと凝視され、ルーナは思わずアマリーに身を寄せた。皆の態度がルーナの愛らしさによるものだと察したアマリーは、彼女を安心させるように微笑むと、未だ動きを止めている者たちに対して口を開いた。

「ひよっとして遅刻だったかしら？」

主だった神官がおらず、もう一人花姫と思われる少女も足りないところから、遅刻ではないとわかっていたが、アマリーは緊張を解すように冗談めかして訊く。その思惑通り、彼女の言葉にそこにいた全員がハッと我に返った。

「失礼いたしました。お時間の方はまだ大丈夫でございます」

その場にいた神官の中でも、一番年嵩としかきの、そして上位の者と見られる男性神官が恭しく言った。

「よかったわ」

うなずいたアマリーは、ルーナの手を引いて部屋の中へ進む。すると室内にいた二人の少女が慌てて駆け寄ってきた。

「お久しぶりです、アマリーシエ様」

「本当に！ お会いできて嬉しいですよ」

二人はアマリーに会えたことが嬉しくて仕方なく、興奮を隠し切れないといった様子だ。

（なんか憧れのアイドルに会っちゃったみたいだな？ それにしても二人とも綺麗な子だあ……）

姉と二人の少女を観察しつつ、ルーナは何気なく会話に耳を傾ける。そんな彼女に気づいたのか、アマリーはルーナを二人に引き合わせた。

「二人ともアマリーと呼んでくれればいいわ。こっちは妹のルーナレシアよ」

「ルーナレシアです。どうかルーナと呼んでください」

アマリーに紹介され、ルーナが作法通りの礼をすると、二人の令嬢もあたふたと礼を返し自己紹

介を始めた。

「エーメ伯爵の長女でシンシア・アン・エーメと申します」

「わたくしはポーカン子爵の次女でブレンダ・ソフィリア・ポーカンと申します。ルーナレシア様」

「ブレンダとわたくしは、母方の従姉妹同士でもありますのよ」

はにかんだ笑みをルーナに向け、シンシアが説明する。アマリーと同じ年頃の彼女はボリュームのある艶やかな赤い巻き毛と、うっすらとそばかすの散る白い肌、はしばみ色の目を持つ少女だ。華やかな色彩の外見とは裏腹に、その話し方は穏やかで優しい。

もう一人ブレンダの方は、まっすぐな紺色の髪を肩ほどに切り揃えた、灰色の瞳の少女だ。愛らしい顔立ちに、悪戯っぽい表情がなんともよく似合う。ブレンダの方はどうやらアマリーやシンシアより一、二歳年下のようだ。

（二人ともいい子そう。仲良くなれるといいなあ）

貴族令嬢ともなれば、近所の子供と気軽に遊ぶというわけにもいかない。そんな事情もあり、就学前のルーナには同じ年頃の友達どころか、顔見知りさえ少なかった。豊穰祭は、ある意味友達作りのチャンスだと気づき、彼女は一気にテンションを上げたのだった。

（花姫は五人だから、あと一人いるよね？ もう一人知り合いができるかもっ）

ルーナの心の内を読めたのか、アマリーは苦笑しながら控えていた神官たちへ尋ねる。

「あと一人、いらっしやるわよね？」

「もうまもなく到着されると思いますけど……」

立ち読みサンプル
はここまで

「そう。わたしたちが最後じゃなくて良かったわ。そろそろ時間ですし」
申し訳なさそうに言う神官に、アマリーは首を横に振る。特に気を悪くした様子もない彼女に、
周りの者たちは胸を撫で下ろしたようだった。

「もう一人の姫もそろそろお見えになると思いますが、とりあえず簡単な儀式の説明をさせていた
だいてよろしいでしょうか？」

「ええ、もちろんよ」

にっこり笑うアマリーに、神官たちはまたホツとしたように笑顔を見せる。

（なんか神官さんたちって、大げさなくらい気を使ってるんだけど。…今まで花姫との間で問題
があったりしたのかな？）

花姫は貴族の女兒から選ばれる。神官とはいえ、自分より下の者と見下してくる令嬢もいたのだ
ろう。しかも今年は、公爵家の姉妹が花姫に選ばれているのだ。不手際があつては機嫌を損ねられ
るだろうと、神官たちが最大限に気を使うのも仕方がないのかも知れない——もつともルーナたち
にしてみれば、それはいささか失礼な思い込みなのだが。

「儀式といつても、難しいものではございません。まず穢れを祓^{はら}ってください、後は神官長からお
一人ずつ承認の証として祝福をいただきます」

ふんふんとうなずきながら、素直な様子で説明に聞き入る少女たちに安堵したように、神官はさ
らに説明を続けていく。

「祝福をいただきましたら、神々に祈りを捧げて儀式は終了です。その瞬間から姫君方は、正式に

花姫とられます」

（儀式っていうから、もつと大掛かりなものかと思っただけど、意外に簡単なんだ……）

ルーナはそんなことを思いながら、続きに耳を傾けた。やがて一通りの説明が終わる頃、ようや
く最後の一人が到着したと先触れの下級神官が告げた。

「やっと来たのね」

呆れた様子でアマリーがつぶやく。説明のため早めの集合を要請されていたにもかかわらず、儀
式の刻限ぎりぎりにやって来る人間に対して、少しばかりの皮肉が漏れたのも仕方がないだろう。

「さすがにこのお時間は非常識ですわね」

「神官長様もお越しになる大事な儀式ですものね……」

シンシアとブレンダも、困惑顔でアマリーに同意した。ルーナはそんな会話を余所^{よそ}に、最後の花
姫はどんな子だろうなどと考えていた。

しばらくして、広間の入口に現れた新たな神官の男性と、その後ろに続いた少女が目に入ると、
ルーナは「あっ」と声をあげた。

最後の花姫——それはクレセニア王妃キーラの姪^{めい}にして、ネグロ侯爵令嬢マヌエラだった。

驚いたままマヌエラを凝視するルーナを訝^{いぶか}り、アマリーが小さな声で尋ねる。

「知り合い？」

アマリーにそう訊^きかれたルーナは彼女を見上げて、その耳^{みみ}に囁いた。

「あのね、ネグロ侯爵令嬢で、王妃様の姪にあたる方だよ」